平和を織りなす糸

沖縄県立開邦高等学校三年　宮城　心輝

"The atomic bombs were generally needed.(原爆は一般的に言って必要だった。)"アメリカ留学中のアメリカ史の授業で先生が言った一言だ。体からマブイが抜け落ちたように思考が停止し、私は言葉を返すことができなかった。「国や立場が変われば、捉え方も変わる。」分かっていたつもりだったが、実際にその認識のギャップを目の当たりにし、大きなショックを受けた。

原爆や戦争が必要なわけがない。いや絶対にあってはならない。しかし、アメリカの人に日本や沖縄の戦争に対する考えを押しつけるのは一方的ではないかとも思えた。彼らにどのように伝えたら良いのか分からず、思い悩んでしまった。そこで今、アメリカにいる私にできることは何か。それは戦争中の両国の状況を深く理解することだ。

私の祖母は曽祖父の出兵した先のパラオで生まれ、その曽祖父は食糧不足により戦争中に亡くなった。祖父は北部の山の壕中で沖縄戦を過ごした。二人とも戦時中はまだ幼かったため記憶はあまり残っていないと言うが、共通して口にしたのは、「食べて生きていくのに必死だった」ということ。口に入るものがあれば何でもというように、食中毒の可能性のあるソテツを乾かして食べる「ソテツ地獄」も経験した。戦時中は暗い壕の中で恐怖に怯え、戦後もテント小屋で空腹を凌ぐ生活。進学したくても高校に行けない人も多かった。さらに二人が語ったのは、この大変な状況すらも「当たり前」に感じていたということだ。やりたいことが自由にできない、生きたい人生を歩めない日常があったことに大きな衝撃を受けた。そして、今の私の何不自由ない生活が決して当たり前ではないということ、また祖父母たちがその時代を必死に生きたからこそ今の私がいるということを痛感した。

一方で、辛い思いをしたというのは戦争当事者の日本も他国にも言える。アメリカ史の授業で習った「バターン死の行進」では、日本軍がフィリピン攻略の際に、アメリカ、フィリピンの捕虜を収容所まで過酷な環境と残酷な扱いの中で歩かせ、七千人以上の死者を出している。もはやどちらにも正当化できる正義はなく互いに傷つけ合う。これが戦争の愚かな悪夢であり、二度と戦争を繰り返してはならない所以なのだ。

留学をきっかけに新たな発見をし、「知る」ことの大切さを実感した私は、アメリカの人にも日本の視点を知って欲しいと思い、アメリカ史の授業で太平洋戦争について語る機会をもらった。アメリカの人に伝えるという立場に立ち、準備として自分で疑問を持って調べる中で、あの惨劇の歴史の過程や原因にも多くの発見があった。それをプレゼンテーションの形で発表した。原爆が二十一万人以上の尊い命を奪い、放射能の深い傷跡まで残したという事実。市民が巻き込まれた沖縄の地上戦の凄惨な現実。クラスメイトは熱心に聞き入り、考えさせられる内容だったと言ってくれた。日本の視点から発したメッセージが彼らに一つでも届いていることを願う。

唯一の被爆国の日本。地上戦が起きた沖縄。私たちが本当に平和の懸け橋になるためには、戦争が人を追い込み、他人の命を尊重する心まで奪ってしまうという無惨さを知ること。昨日まではそれぞれの幸せを楽しんでいたのに、一度戦争が始まると、互いを敵と見なし、命と大切なもの全てを奪い合う。そしてそれが世界中に伝染していく。その結果残るのは焼け野原と化した血の街と残された人の哀しみ。これほど酷いものは無い。だが、その壮絶な惨劇の記憶も、時の流れによって風化されつつある。私の祖父母は当時の幼さゆえに戦争の記憶が少なく、戦争を生々しく記憶に刻む彼らの上の兄弟や親はすでに亡くなっている。もしいつか戦争を過去の歴史としてしか知らない世代ができてしまうと、いつの間にか時代の流れに逆らえず、七十九年前と同じように惨劇への道を歩み始めるかもしれない。それを止めるためには、私たちが彼らの記憶、平和の思いを追体験として次の世代に語り継いでいかなければいけない。彼らが必死に生きて繋いできた命のバトンには、平和を夢見て散っていった人々の想いも詰まっている。さらにその想いや平和の大切さを、国境を越え世界に広げていく。真の平和には世界各国の歩み寄りが欠かせないからだ。

命どぅ宝。「全て」の命が「等しく」かけがえのないものだということ。血を流す世界ではなく、血と心を通わす世界を作るためには、お互いの国の立場も深く知り、考え、発信していくことが大切だ。今回の経験を通して、将来グローバルヤングリーダーとして世界に平和を発信していきたいと思った。世代を繋ぐ縦の糸。世界を繋ぐ横の糸。それらが織りなす真の平和を作っていくのは僕たちだ。